



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イギリスの演劇的風土について：民族的芸能の展開
Author(s)	柏倉，俊三
Citation	北海道大學文學部紀要，19(1)，1-29
Issue Date	1971-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33349
Type	departmental bulletin paper
File Information	19(1)_PR1-29.pdf



イギリスの演劇的風土について

——民族的芸能の展開——

柏 倉 俊 三

イギリスの演劇的風土について

— 民族的芸能の展開 —

ロンドンの北部 Shoreditch に Leicester's Men の James Burbage が「演劇場」the Theatre をつくったのは、一五七六年のことであった。これは、この国はじめての一般庶民への、公開劇場であったから、Shakespeare (1564 ~ 1616) や Marlowe (1564 ~ 93) の生れた時には、イギリスには特別の目的、特別の観衆のためへの上演場所として使用された大学や王侯貴族または公共施設の広間などを別として、公式にいわゆる劇場と銘打ったものは一つもなかったということになってくる。それが、その後僅か数十年でギリシアを除いては見られない空前の演劇的盛況を現出することになるのである。この爆発的現象は、一見まことに奇異に見えるけれども、実はこの背後には過去数世紀にわたる長い準備期が控えていたのであった。この準備期という言葉の意味は必ずしも簡単ではない。この時期における演劇本能につながる演劇展開の諸要素がいろいろ複雑だからである。一たびは中世のキリスト教会とゲルマン人が協力して亡びに導いた古典劇の後に、キリスト教会が自らの中に育てた、いわゆる教会劇を、近代演劇

の一つの源流と見るならば、前述の諸要素はそれぞれ一つの源流あるいは支流となり、これがことごとく合流して、エリザベス演劇という大河を形成したことになる。またこの教会劇を近代演劇の一つの種子というならば、これをうけとって、エリザベス朝演劇という大樹に育てたイギリスは、すぐれた苗木²であつたということになる。いづれにしろ、イギリスにおける教会劇の誕生に先立って、すでに演劇につながる諸要素例えば民族的庶民的土俗的なものもろの雑芸、祭事、催物などが豊かに賑わつていた。これらはみな演劇が育つ風土をつちかつたものであつた。それでここでは、本題すなわち「イギリスの演劇的風土について」の下で、もろもろの雑芸のうち、イギリス人がゲルマン族の一支族として大陸に居住していたときからの民族的な芸能のみを主題として、その消長を扱い、イギリスの演劇的風土としての特質の一部を明らかにしたい。

II

イギリス人の先祖がまだ大陸に居住していたころ他のインド・ゲルマン民族同様彼らの間には一種の職業的な楽人、楽師があつた。*Beowulf* などに、*Scôp* (*Sceop*) とか *gleeman* (*gleōmon*) という語で呼ばれるのがそれである。彼らは南欧の芸人たちとはちがつて、その社会的地位は高く、自らの領土を有し、楽人として君側に侍し、時には戦士として戦陣にも出入し、陣営または城砦の宴席にあつて、武勇や冒険などを主題とした即興または伝承の歌謡を豎琴にあわせてうたい、戦士たちの無聊を慰めたり、土気を鼓舞したり、また座興を添えたりしたのであつた。したがって王侯貴族はよろこんで彼らの歌曲に耳を傾け、彼らをその配下に抱えたのである。このような歌びとを総称して、中世では *minstrel* すなわち弾唱詩人と呼んでいる。これは本来「お抱え芸人」の意味であつた。これらの

主持ちの *minstrel* も、その主人の許可を得てではあるが、彼等の風習にしたがつて、一所に定住しない流浪の弾唱詩人同様、あたかもわが武者修行の武士のように諸国を遍歴し、自らの技を競い、褒賞を喜んだりしたことは、例えば *Old English Poetry* 中の最古の一つといわれる *Widsith* や *Deor's Lament* などによっても明瞭である。前者では ⁽⁴⁾ *The Myrings* 出身の主人公 *Widsith* が外国への使節に従って隣国に赴くことになるが、つづいて諸国遍歴の旅のほり、その足跡は少くとも旧ヨーロッパ中部、近東の一部に及び、十数ヶ国の君公に会い、その御前に演奏して金銀その他の財宝を贈られている。もちろんこの詩については、いろいろの説があつて、⁽⁵⁾ *Widsith* は一実在の *gleemon* の実際の遍歴の記録としてうけとるべきではない」としても、またこの詩篇中には後人の添加があるとしても、例えば、⁽⁶⁾ *the Medes* や *Persians* や *Hebrews* などについてのくだりは追加であるとしても、なおその中には当時すなわち大陸におけるイギリス人の先祖たちの風習をうかがうのに格別の支障はない。また *Deor's Lament* の *Deor* は、永年 *the Heodeningas* の *Scōp* であったが、*Heorrenda* なるものが彼の技を凌いだので、いまでは、*Deor* は、その地位と領土を彼のために失ってしまった悲しみと不運をば、古の英雄たちの忍苦を偲んで、諦めようというのであるから、彼らが互にその技を競ったことを知らせてくれるばかりでなく、これらの歌人が流浪のものとも限らなかつたことをも教えてくれる。さらに例の *Beowulf* にはこつした *Gleemon* の活躍が見られる。*Hrothgar* の例の *Heorot* では、*Grendel* の忌み嫌つた竖琴の音と *Gleemon* や王はじめ *thanes* の歌声がきかれたのであつた。しかしこれらの作品の内容は、いまのイギリス人の本土ではなく彼らが大陸に居つたころのものであるから、これらの風習そのものは大陸での彼らの風習を示すものではある。しかしこれらの風習をイギリス人は彼らの他の風習とともにいまの島国に持ち込んだのであつた。その最も簡単な、手近な例証を、私どもはイギリス最初の詩人といわれる

Cedmonの伝説的物語に見ることができよう。とにかくブリテンの島に「つぎつぎと侵入を繰り返したイギリス人とブリトン人との長い争いは、NorthumbriaでもまたWessexでも、たしかに多くの新しい歌曲の誕生を促したのであった。」そしてこれによって彼ら侵入者は士気を鼓舞したのであった。後年King Alfred (849—899)なども、the Danesとの戦いに志を得ず、意気消沈の折などは歌謡をうたって、自ら慰めて氣力を恢復したといわれるが、その歌はまたこうした異端の歌であったことは推測に難くない。こうした弾唱詩人すなわちMinstrelと大同小異の性質、むしろ異名同質のものに、Bardと呼ばれるものがある。これはpoet-singerとかstrolling-musicianとかいう意味の古いケルトの世界のものであり、ゲルマンの場合と同じような使命をもっていた。現在ではもっと通俗的な意味で使用されているが、そのもともとの職業は、部族の族長たちや戦士たちの業跡、歴史的事柄、あるいは民族の伝承などの作詩をなし、竖琴に合せて歌うのであった。いまWalesでは地を変えて行う年次大会であり一種の芸能祭であるEisteddfodで認められたpoetをいうようである。

つぎにフランスの系統をもつものに、Troubadour及びこれにととても似ている言葉のTrouvereがある。ともにフランスにその郷土をもつ弾唱詩人、吟遊詩人の一種である。前者Troubadourは、その語形を見てもラテン系であることはわかるけれども、その語義は判然しない、しかしフランス語のtrouver イタリア語のtrovareなる動詞につながるものと一般からいわれている。すなわち「見つけ出す」「新工夫をする」あるいは「詩をつくる」というような、何事かをつくり出すという意味が発達したものと考えられている。もともとTroubadourは、南仏なる地中海沿岸のイタリア寄りの地方Provenceに最も多く住居していた詩人、歌人たちの総称であって、東スペインや北イタリアにも散在していたようである。その最もはなやかな活動期は十一世紀—十三世紀といわれているが、この派の著しい特色はその主題にある。すな

わちイギリスや北欧の *scop* や *gleemon* の場合は英雄及び英雄的行為であつたのに對し、彼らの好んだ主題は英雄的なものというよりも騎士たちナイトの情緒生活、恋愛などであつて、前者が叙事詩であるのに反し、これはいきおい抒情詩が主となつてくる。ところが *Trouvère* の場合は、*Troubadour* 同様ともにその起源をフランスに持ちながらも、その性質はややちがつてくる。この一派は、北フランスがその郷土であり、そしてこの郷土の条件がまたこの流派に影響を与えたようである。即ち前者が絢爛華麗な言葉を操り、流麗な調子を奏でて、愛情の美しき特に恋愛を歌つたのに比べて *Trouvère* はしばしば粗剛な調子で武勇の物語を扱つたのである。そしてほとんど同じころ、すなわち十一世紀にでているが、後者はいろいろの要素を吸収し、そくばくの変質をも見せながら、第十四世紀までも生き延び、他の分野にも影響を及ぼしたようである。すなわち後者は、中世の物語詩、英雄的叙事詩などの成生にも参与したのであつた。*Chanson de geste*, *Legend of the Round Table*, *Romance of the Rose*, *Reynard the Fox* などとは、その例としてあげることができよう。また前者が近世イギリス抒情詩の興隆に大いに寄与したことは、ここに改めて述べるまでもない周知のことである。またここに附加したいのは、ドイツの第十二世紀—十四世紀にかけて恋愛を歌つて巡遊した詩人 *Minnesinger* と称せられる一群の存在したことであるが、これは北欧的な *Scop* などの流に立つというよりは、むしろ *Troubadour* の系列に入るものである。また同じく中世に *Jongleur* なる語が一種の弾唱詩人、吟遊詩人の意味に用いられている。これは *Norman Conquest* 後は、イギリス国内にも入つて来たものであるが、これは、*juggler* などと同義で、これらの吟遊詩人が、やがて坐興に現代の手品師のようなことを行つたところからでてきた名称であつて、時代もたつて、このころになると、弾唱詩人、吟遊詩人そのものにも、その性質の上に随分の変化がきていたのであつた。

III

さて、イギリスでは、早くから大陸よりその同族の風俗習慣をそのままにうけつぎ、Scôp とか gleomon などの職業も、そのままこの国に移入された次第をさきに述べたが、その大陸の同族は、大陸の他の民族、主としてラテン民族などとともに、キリスト教の影響下にさらされ、これといろいろの交渉をもつことになり、その本来の面目を失うことになるのであるが、イギリスの場合は、必ずしも大陸の同族とその歩調をともにしていない。それのみか、その民族固有の性質のほかにその置かれた地理的事情のためもあって「イギリスはその歴史では相当後にいたるまでローマの影響から離れており」随ってゲルマンの Scôp のはじめからの展開とその後のローマ的要素例えば Roman Minus などとの交渉、混入、汚染の次第をうかがいえる便利をもっているともいえるのである。とにかくゲルマン族の一支族としてブリテンの島に渡った時、彼らイギリス人は、彼らの民族自身の独特の歌を止めなかった。それのみか、ブリトン人との長期抗争は、彼らの志気の鼓舞のためにも、その民族の豎琴のうたはその必要度を高め、そのためにもいろいろの歌の誕生を促したと考えてよい、ただ King Alfred やその他の人たちを激励した歌謡が忘れられてしまひ、わずかにその痕跡を The Anglo-Saxon Chronicle などにのこしているのみであつて、一般から忘れられたまのである。ところが、六世紀の終り、この島の征服が大体終末に近ずくと、キリスト教の伝来があつてその光は南北よりこの国を照しはじめた。精神界のこの大事件は当然日常万般における彼らの進路、特にこの異端的内容をもつ文学的芸術的風習の進路に方向転換を促した。僧侶の手によって当然宗教文学が生れるからである。

しかしその際彼ら僧侶自身に多くの矛盾を見、右手と左手とではその持つものがちがつてゐた。例の Aldhelm^⑧

またはEaldhelm(640—709)は、彼自らが恰もgleomonであるかの如く、橋の上に屯し、ミサから家路をいそぐ人たちを待ち伏せて、歌をきかせたけれども、自らまた聖歌を書いたのもある。その場面はウエセックスであるからこの場面はサクソン人であるがNorthumbria 即ちAngles の場合は、当時文化面ではイギリス全土の魁をなしていた国だけであつて、すでに触れたとおり、聖職につながるCædmonが天地創造をはじめ聖なる歌の一連をはじめていた。聖なる題材にもかかわらず、その感覚や理解はゲルマンの北欧的であつたのは、是非もないことであつた。そして作者不詳のJudith^②などは、そのまま、豪壮豪快、誠実ではあるが沈鬱、戦闘的悲劇的なゲルマン氣質の見本としてHeorotのようなホールでの弾唱に耐える歌とはなつたのである。そこで実際の場合古風な弾唱詩人は消えてなくなつたのではなかつた。半は異端の八世紀の悲歌The Wandererなども流浪の原因はキリスト教による追放ではなく、世事から起つたのであつた。The Seafarerなどを貫く魅力は全く異端的、ゲルマン的なもので、如何にしてこれをキリスト教的なものと調和させるかというところに、作者や弾唱者の苦心があつた事實は、その首尾一貫していない姿体からもうかがわれる。しかしやがて作品としてはこの種のものは姿を消し、その後は僅かにThe Anglo-Saxon Chronicle の中でてくる戦争詩などに充分の投影を見せるけれどもE. K. Chambersなどもさうとおおり、八世紀以後になると現在のような古英詩は不可解な終りをとげている。しかしこのScôp や Gleomon などのなおも存続し活躍していたことは、歴史そのものが語ってくれる。即ちAlfred がthe Danesを欺いたといわれるのは竖琴弾唱者に扮装してであつたし、またこんどは逆にAnlaf がthe Saxons の鼻をあかしたのは、同じくこの扮装によつてであつた。もともとゲルマン民族の信奉していた北欧神話の世界にあっては、詩はOdin(Woden)の声であり予言であり、作詩は、Cædmonの場合によつても察せられるとおり、神の業であつた。従つてそれ自体当

然尊敬をうけるべきものであり、しかも彼ら Scôp は王侯貴人の側に侍してその職責を果すものであるから当然相当の地位を保持したばかりではなく、随時随所に自由に入出できる特権をもっていた。そこである時は敵中に潜入して謀者の任務を果し、さらにすすんでは囚われの主人などを救い出すというようなこともあったのである。彼らは、無聊に苦しんだ貴人や武人に楽しみを与えては金銀珠寶をめぐまれ、さらに広場または酒場などに集る聴衆によるこびを与え、他面書物のない時代の記録係などの役割を果し、雑誌や新聞のない時代に報導の機関となり、あるいは道聴塗説、いろいろの風説を流布し、流言蜚語を流して、輿論をつくり、その煽動者となるなど、社会的にも随分重要な役割を果すようになり、単なる一介の樂士では終らなかつたのである。慥かに Scôp は、その中に随分と異端的なものを含んでいた。にもかかわらず Alfred 大王のような敬虔な俗人はもちろん多くのキリスト教の bishops が、いまでは民族的異端のうたでもあり、民族のうたともなつたものに、同情を表白することを恥辱とは考えていなかったようである。しかもこの歌手たちは、大体に於て教会そのものからは公的には好意をうけとれなかつた。一層嚴重な聖職者たちは、特にこの歌手たちが宗教関係の施設に引入られることを攻撃した。そして六七九年にはローマにあったイギリス関係事項処理の宗教会議で、また七四七年には Clovesho の宗教会議で、ともにそれらについての禁止令がだされたのであった。温厚の長者の名声を恣にした Venerable Bede (673-735) さへ当時 Northumbria の Bishop たちの住居で Scôp たちの、かかる演出が行われることを歎いている。また第八世紀の終り Charlemagne 大帝の顧問であつた Alcuin も Lindisfarne の bishop なる Higbald に対して書翰を与えて、同様趣旨の警告を行っている。その後約二百年 West Saxon 王 Edgar の名臣 Dunstan が、この国の宗教界の革新を決意した時も、このような異端的なものに与えられる恩恵が問題になつていたのであった。このように、教会のみならず、為政者たちもたび

たび法令、布告その他の方法で、表面的には彼ら Scôp たちにきびしい批難を浴びせながらも、その法令や禁止令に關係した上級僧職や為政者が、実際には彼らを歎待し、その来遊をよろこび迎えたことは、決して理由のないことはなかった。しかも当時のこの教会側が Scôp に示した敵意は Scôp そのものの活動の側からは、充分の説明となる材料が見当たらないといわなければならない。しかしそれらのことはともかくとして Scôp の歌は、本質的にゲルマン的異教的であるだけに、この弾圧は、それだけ、異端世界のキリスト教世界への推移に役割を果すことであつた。いづれにしろ、ゲルマン世界とローマ化されたキリスト教世界との距離は大きかつたのである。キリスト教側から不道德で粗野かつ戦闘的で血腥い行為を主題とする歌が一般にゆき亘ることは快いことである筈がなかつた。

かくして異端世界のキリスト教化がすすむにつれ、それまでのゲルマンの世界には、推移と変転が起り、そこにはローマ世界の影響がようやく濃厚になつていった。そして歌つて豎琴を奏することには、¹⁵「新奇な、まことに好ましからぬ諸芸が」加えられるようになった。しかも、前述の歌手たちに加えた批難は、この「新奇な、まことに好ましからぬ諸芸」に対して、よけい加えられたようである。ところで、¹⁶この諸芸こそ、キリスト教の伝来とともに、いわばラテン文化の一現象として、南欧より伝えられた Mimus 及び Pantomimus 的要素のものであつた。この二つは古典劇の末流、いわばその鬼子的存在であつて、古典劇の情落した、なれのはてであつた。すなわちギリシア劇はローマ劇にその遺鉢を伝えたが、ローマも末期になると、この古典劇は国勢の衰退と市民の逸樂にこたえて、かつての莊重さ典雅さを失ひ低俗卑猥な演劇即ちたわむれとなつてしまひ、もっぱら観者の低俗さに応ずることになつた。そしてその悲劇から流れてたのが、Pantomimus であつた。これは大体神話を主題としたものではあるが、はやくも高邁な風格を失つてしまつていた。この中で、はじめは、歌の部分だけが歌誦と音楽に伴われながら、無言の踊手

によって身振りで示され對話の部分が俳優によって演ぜられたものであるが、後には對話の部分がごとく脱落し、全体が歌謡と音楽に伴われた無言の身振舞踊となつてしまつた。所作全体が頽廢的官能的であり、時には煽情的でさえあつた。他方 *Mimus* は、古典の喜劇の末流であり、縁者であつた。もともと、これはイタリア南部のあるギリシヤ植民地から伝えられた一種の *farce* (笑劇) であつた。その主題は多くは不倫の恋愛であり、しかもその場面が写實的であり、この舞台にはじめて登場することになつた婦人のうすものの服装などは、はなはだしく煽情的でさえあつた。そして *Pantomimus* が多く上流社会に應じたのに対して、これは特に一般庶民に喜ばれたのであつた。もともとこの笑劇は、諷刺性をもっており、それに低俗卑猥な舞踊道化などが加わつたものであつて、その点また特に庶民にうけたのもあつた。しかしその風刺が時には度を越して、為政者の怒を買い、作者が火刑に処せられるなどのこともあつた。これらの演技者は、古代ゲルマンの弾唱詩人や吟遊詩人が地位ある家臣や戦士であつたのに比して、概して彼らは、奴隸でありあるいは奴隸の階級に属し、もちろん社会的地位も低く、したがつてまた健全な社会の分子ではなかつた。しかし、他面また収入なども豊富であつたため、その私生活などは贅沢華美であり、害毒を良俗に流すという風があつた。それだから当然社会は彼らを敵視し、これを攻撃したのである。やがてローマ帝国が北方蛮族のために滅亡するに及んで、この情落した演劇も当然その運命をともしせざるを得なかつた。そして支柱を失つたその関係者たちは、このはなやかな舞台から転落し、奇術師あるいは動物使いなどに身をおしたり、またはそれらの中に混入して諸方に散じ、中世の流浪の芸人の社会をつくることになつたのである。この流に立つものが、いわゆる南欧系芸人とか、ローマ系芸人とか、いわれるものであり、これがキリスト教の伝来以来、大陸文化とともにイギリスに流入したのは、自然の数であらう。この流入はすでに八世紀の出来事であり、それにつづく二百年は、その継続であつたと

いい得よう。もちろん、この時期は文献の最も少い時期ではあるが、しかし当時のラテン及び古代英語の稿本その他に出てくる数多のおどり手、曲芸師、手品師、熊つかいなどの彩色挿絵の類などにより、また *mimus*, *iocista*, *scurra*, *pantomimus* などの語を解説する注などによって、充分察知することができるのである。かくしてゲルマン系の歌い手とその芸は、時の経過とともに、程度の差こそあれ、除々に混合が行われていったのである。

それについての大陸の場合の記録は、なお少いけれども、この平行二線の混入は、民族の移動混入と運命をともにしたことは、想像に難くない。そこで¹⁷ *Ancestral deeds were sung to the harp, and therefore, it may be supposed, by a scôp, and not a chorus, before the Ostrogoths in Italy, at the beginning of the sixth century.* とされることになり、かくして、また五〇七年フランク王 Clovis I (d. 511) は、逆に、東ゴス王 Theodric (d. 526) に対して人を遣わし、南欧の音楽を学んだ *citharoedus* を求め、そのため Theodric の重臣の哲学者 Boethius (ab. 474-525) が、その人選をするというようなことが起るのである。これらの蛮族は、もちろん演劇に興味はなかったが、しかしその征服した領土の *mini* (あるいは *minus*) は、彼らの酒席に坐興を添えたらしい。また四四八年例の Atila (?-453) の招宴において、各国使節は、はじめは古い昔の武勇談にその心情を煽られ、つぎに¹⁸ *Scythia* 及び *Morris* の道化によって笑わせられた、即ち相反する二つの悦びを誘う催しによって遇せられたという。Atila は、もちろんゲルマン人ではないが、当時の彼らゲルマン人の風習や嗜好をうかがうに足りるであろう。即ち四二九年アフリカに侵入した the Vandals は、その地に人気を博していた見世物 (*spectacula*) を大いによるこんだといわれ、また四六二年から四六六年の間に the Visigoths の王 Theodric (東ゴス王とは別人) の場合にも、同じようにこうした見世物が、ところを得ていたといわれている。そしてこうした二つのちがった系統の娯楽の混合融合は、徐々にすす

み、その後三世紀 Charlemagne 大帝 (742—814) の治世中に *ioculator* なる名称の下に行われるようになった。しかしこの二要素中での見世物式のものに對しては、この場合も、イギリス同様教会や聖職者たちの排撃するところであった。そしてこの点に關しては、さきに述べた例の *Alcuin* がその代表であった。そして彼の Charlemagne に対する影響力は強く、したがって、いろいろの形で、この南欧的要素の見世物禁止の措置が講ぜられた。ところが一方において Charlemagne はその同族同様、北方的な豪快勇壯な物語の樂奏を大いによろこび、その宮廷で演出した物語は、例の中世の代表的武勇物語 *Chanson de geste* にその基礎を与えるという風であった。ところが *the Pious* と呼ばれた、その子 *Louis I* は父の好みをうけつがなかった。そしてそれらにも抑圧を加えたが、しかし永年培ってきた彈唱詩人の社会的地位は殆んどゆるがなかったといわれている。かくの如くしてこの二要素は、イギリスの場合も大陸におけると同様、結び合せた繩のように、からみ合つて推移展開したが、大体に於て、ゲルマン系のもものは、その昔ながらの地位を保持して上流の社会に迎えられ、ローマ系のもものは、むしろ一般庶民をよろこばせたと考えてよいようである。

IV

かかる事情のところに、イギリスでは例の *The Danes* 即ち *the Norsemen* の侵入が行われることになる。彼らはもともとアングロ・サクソンとは同族であつたから、その風習もまた似ていたことは当然であり、したがつて *Brunanburh* (937) や *Maldon* (991) の激戦などによつて象徴されるような烈しい争闘が、両者の間には随分長期に亘つてつづけられ、この間戦場での彼らの士氣の鼓舞や敵状や敵国内の事情調査に、彼らの風習であつた *scop* や

gleomon などの活躍があつたことは極めて当然である。けれどもそれらを充分に詳かにする文献はのこっていない。しかし先に述べた Alfred 及び Anlaf がこゝにも豎琴ひきに扮装変装してその相手をはかつた逸話などは、この間の消息を伝えるものといえよう。かくして彼ら Scöp あるいは gleomon 即ちいわゆる Minstrel は、彼らの社会における重要なファクタアとなつていたことは察するに難くない。そしてついに the Danes がイギリスを占拠し、一〇一六年 Canute が英王となり、彼自身は従来の蛮行をすててキリスト教に帰依したが、しかし蛮行を恣いままにしたその子らの所業によつても察せられるとおり、異教的で北方的な衣を容易に脱ぎすて得なかつた彼らの間に、Minstrel が重んぜられることはあつても、決して軽んぜられるとは考えられないのである。しかしやがて一〇六六年 Norman Conquest が起り、この国はノルマン人によつて征服されるのである。

いふまでもなく、ノルマン人とアングロサクソン人は同族であつた。すなわちその最初の主権者 Rollo (Hrolf or Rou, 860 地を得て、ノルウェーの海賊であつて常に西欧各国の海岸を襲つていたが、第十世紀にフランスの王女とそのノルマンディの——980?)は初代の the Duke of Normandy となつたのであつた。彼 Rollo はその配下に多くの Scöp あるいは gleomon 即ち豎琴ひきを抱えていたが、彼らはみな Rollo とともに北欧スカンデナヴィアからノルマンディに移動してきたのであつた。それだから彼らが仏国への移住後も、盛んにその祖国の歌を、祖国に居つた時と変りなく、豎琴に合せて歌つたのであつた。その用語はもとより祖国の言葉であつた。彼らは、イギリスに侵入した同族が簡単にイギリス人に同化したようにはいかなかったが、もともと一種の弾力、順応性をもっている民族であつたようである。それで月日の経過するうちに、いつの間にか、この移住地の言葉を使用するようになった。かくて彼らはその日常語として、ラテン語の俗化した土語すなわちフランス語を使用するようになったばかりではなく、風俗習慣も、新移住地の感化をうけてい

た。しかしその尚武豪快の血に変化を見せたのではなかった。やがて一〇六六年ノルマンディ公ウィリアムは、南英より侵入して *Senlac* (or *Hastings*) で英軍と戦うことになるが、ウィリアムの軍勢の陣頭には、戦士なる弾唱詩人 (*Trouvere* 即ち *Scôp*)²⁵ *Taillefer* があつて、*Charlemagne* 大帝や *Rolland* などの回教遠征の武勇物語を弾奏して大いに士気を鼓舞しながら、自らも力戦し、ついに生命をおとしたといわれる。どの弾唱詩人もみな同じとは、いいかねるだろうが、とにかくこの姿、この風習は、ゲルマンの昔と毫も變つてはいない。しかしもとのままで變つていないのは、その風習だけであつたといわなければならない。その歌の内容はすでに北欧のものではなかった、特にその用いられた言葉は、もはや当時の英語には全く無縁で、英人には通じないフランス語即ち *Norman French* なのであつた。そしてこの異なる言語や異なる趣味、嗜好のものが、イギリスの王朝を奪い、その上層部に坐し、この少数者が、この国土を支配することとなつた。この征服の結果としての社会機構の變化は大きかつた。特に言語に関しては、學術語はもちろんラテン語であつた。そして弾唱詩人たちのそれまで扱ひどころとなつていた上流社会の日常用語が、フランス語に變つてしまつた。公文書はもちろん教会での説教の言葉も、市場での物品取引の商業用語も、教育機関で用いられる知識上の説明用語も、さらにまた文学、歌謡のようなものに用いられる趣味本位の用語に至るまで、みなノルマン・フレンチを以て話されることになり、従来の英語は抑えられて、一般民衆の間に沈められてしまつた。その他国家の法律、諸制度、また一般の風習など、すべてフランスを模倣するを以て、理想とされ、フランス化が当時の著しい現象であつた。そして豎琴ひきもフランスから海を越えてこの国に渡つてきた。大体ノルマン出身のイギリス王は、代々 *minstrel* を厚遇したのは事実である。例えばウィリアムは *Berdic* を厚遇した。またヘンリ二世 (1133-89) の命によってノルマン王朝の歴史 *Roman de Rou* を書じた *Wace* (fl. 1170, d. 1174?) も実は

Jersey 生れの minstrel であった。⁽⁸³⁾ Edward II (1284—1329) の時には夥しい数の Minstrel がフランスからロンドンに來住し、フランス人としての姓名をイギリス風に改め、英仏と言語の使い分けまでして活躍し、国王の保護を得ていたのであった。特に十字軍出征の折などは、英国王はつねに多数の Minstrel を引き連れて大陸に渡ったのは史上の事実である。しかしこれら過渡期の Minstrel は、概してフランスよりのものであった。いわゆるイギリス人の中世の英語が、国民用語として公認された形になるのは、一二五八年国王の布令にはじめて彼等庶民の言葉が使用されてからである。言葉の問題は深刻なものをもっていたのである。そこで Norman Conquest の結果は、従来の the Anglo-Saxons 及び the Danes のゲルマン系 minstrel は、その主を失ったのであった。これは単なる失職を意味するだけではなかった。その他の財と従来の社会的地位の喪失となったからである。即ち言葉という連絡機関を失った彼等弾唱詩人は、その敵愾心などというものを別にしても、かつて彼等が所属していた上流階級にとって代って支配階級となった新たな上流社会に接することが出来なくなってしまった。そこで彼等は被征服者となった一般下層階級の間に、その友人として参加し、流浪の芸人となってしまったのである。

V

イギリスの社会機能その他に大変革をもたらした Norman Conquest のほかに、ここでもう一つ考慮の中に入ってくることもある。それは一〇九五年より一二七二年に及ぶ史上空前の重大事件、いわゆる十字軍なのである。これによって、西欧人は未知未見の人種とその世界に接し、彼ら自身の狭隘さと外部の広さから、ものの多様性を知ることになる。そこで内部的には、彼らの組織を整え、騎士道などの制度を設定してこれに応え、新しい趣味や趣好、希望を

導入した。外部的には、イギリスと大陸及び東邦とが互に結ばれることになり、その結果中世世界は、一つの共同社会の姿を呈し、相互の影響を濃厚にした。イギリスに関するかぎり、このことはやがて大陸特に南欧的な影響を強く招来する結果となった。そして *Minstrel* の世界については、このことは、すでにノルマン的北仏的なもの、すなわち *Trouvère* たちが過渡期のイギリスを飾っていたのであるが、そこに南欧的な *Troubadour* が流れ込み、はなやかな恋愛などを織込んで、五彩燦然燦爛たるロマンスものと入り乱れて、中世を賑わすことになったのである。例の *Richard the Lion-hearted* (1189—99) のような荒武者なども *Troubadour* 派の *minstrel* を自任し、抒情の恋愛詩などを愛誦したのである。上層社会のフランス化、南欧化がこのようであったから、下層階級がやがて言語的なハンドキャップが薄れる度合に比例して、これに呼応したのは当然であった。かくして、そのはじめ *Scop* が社会的存在として大きく目立っていたこの邦の芸能の世界は、中世もすすみ、イギリスが欧州の西北隅の孤島から欧州の仲間入りをし、その一員となるにつれて、内外いろいろの要素を加えて複雑多様な存在となり、種々の様相様姿を見せることとなったのは、自然の成行であった。そこでいまこれを大まかな線で整理すれば、地域的、民族的、言語的には、まづ北欧的なものである。これはゲルマン全体を含んでいる。したがってイギリスに限れば、古くは *the Anglo-Saxons* ついては *the Danes* 即ち *Vikings* であり、さらに言語としては南方的ではあるが、民族的、気質的には一応ゲルマンといえるノルマン系統のものをも、これに編入しなければなるまい。さらにまた、ある時は、これに対立し、または併立し、そしてやがて混合し融和したともいえる南欧的なものが、一つの大きな勢力といわなければならない。即ちラテン的ローマ的なものであって、むかしのローマの流を汲むすべての外に、南フランスの *Troubadour* はもちろんこの中に包含され、また言語的や素材的にもノルマンもまた半はこれに属するといえよう。そしてこの二つの

複雑な潮流の間に、インド・ゲルマン人種の一民族としてある共通の風習をもつケルトの *bard* がその細かな実情を究明しにくいとしても、とにかく一つの地歩をもち、その機能を果してきたと考えるべきであろう。

VI

これらの芸能的職業人は、すでに述べたとおり、発生的に見れば、上流の支配階級に属していたのであるが、長い歴史の流において、階層的に見るときは、自ら上層及び下層の別が生れてしまった。一〇六六年のノルマン征服までは、民族部族の移動侵入があつたにしろ、同文同種の間柄であつたから、この芸能の面に関してもその相は変らなかつた。

ただ自ら出来た下層の芸人群は大陸のローマ系のものであり、その芸もまた北欧的なものとは趣を異にするものをもつていたのは、すでに述べたとおりである。しかし同種であり、その趣味にも変更をきたしていたノルマン王朝の時代になると、従来上層に屯じていたアングロ・サクソンの弾唱詩人は、上層より転落して下層に移らざるを得なくなつた。

そこでその芸能の世界もいよいよ複雑さを加えることとなつた。しかしここに上層下層といい、上級下級といつても、それは言葉の上では簡単にいえることではあるが、実際の場合、その芸の内容などについては、それほどはっきりした区別をもたなかつた。そこで彼らの芸についていえば、上層上級の樂人にあつては、その本来の使命として、豎琴を弾じて武勇譚を歌うことであつた。主題は即興の歌であることもあれば、伝承の歌の場合もあつた。それはすでに述べたとおりである。下層階級のものの場合は、もっと^⑧雑然としていた。まづ輕業師 (*tunblers, tombeors,*

tombesters) は、輪抜け、宙返り、逆立ち、綱渡り、とび下りなどいう風に、種々の軽業を演じた。それには女芸人もあって、軽業式のダンスなどもあった。また数々の小刀や球その他を投げてうけとったりしてみせる奇術師(juggler, jongleurs)がおった。いろいろの小品を演じてみせる手品師(sorcerer)もいた。また物真似師(mimes)がいて、犬、ロバ、禽などに扮してその啼き声などを巧みに真似もした。さらに動物使い(bear-leaderの類)がいて、熊や猿などを、また時には馬、雄雞、兎、犬、駱駝、獅子などの動物をつれ廻り、現代のサーカスなみに、これらの動物の芸を見せたり、または互に相格闘させたりもした。またローマ時代に行った人間と獣との格闘の流を汲んで、スペインの闘牛のように熊などと戦ってみせることもあった。そのうえ、諷刺を含めて爆笑を誘う道化の類もあった。もともと笑いのための笑いは²⁵ farce (笑劇)であるが、これは minus の本願の一つでもあって、ローマ文化とともに、はやくからイギリスにも渡っていた。また中世も相当にすすんだ後になってではあるが、操人形によって所作を行う²⁷ 人形芸居 (puppetshow or motions) もみられたのである。

以上述べたところは大体下級芸人たちのものであったが、しかし上流に仕える高級な芸人とても、下級芸人の芸を知らないというでもないし、また実際に演じなかったものでもなかった。彼ら高級の芸人といえども、結局芸人であったので、彼らは顧客の求めに応じなければならなかった。従って彼らも、物真似から奇術、軽業、動物使い、道化、時には操人形の業を心得、時には演じたのもあった。そして現に彼らは、禽の真似、小刀投げ、輪抜け、ロバや犬の使い方、人形の操り方法を学ぶように、しつけられたのであった。また他方において下層下級の芸人はその反対であった。即ち彼らは高級芸人の芸を修めて、これを演じたいらしい。それで両者を区別する一線ははなはだ曖昧であった。それでその差別は彼らは何を主とするかということにあったといえよう。このように、芸そのものによって曖昧な区別をするほかに、その使用す

る楽器によっても区別されたのである。当時の芸人によって使用された楽器は、当時相当の数にのぼっていた。しかしその中で最も多く用いられたものは、*vielle* といって今日の *violin* のような楽器であって、これにつぐのは、*アングロ・サクソン* 時代に特に用いられた豎琴であつた。この豎琴と *vielle* は、結局歌声を助けるための伴奏をつとめるものであり、短い作の場合は、全篇を通じて伴奏されたが、長い作品になると、所々の要所と考えられるところで伴奏された。歌われる主題が酒とか女とかになると、抒情詩の形をとり、短い詩となつた。叙事詩的なものは、英雄や聖者の所行、ローマン的な冒險的な物語であり、勢その量が多くなつた。そしてその際は始終の伴奏ではなくなり、単に語られる部分も生れることになり、その中に対話の部分も採用されるということにもなり、やがては、これらが逆転して、歌われるよりも語られる結果を招来し、記録係としての機能をのみ果すことともなつていった。伴奏用のこれらの楽器のほかに、ラッパも相当に用いられた。しかし太鼓になると、品劣れるものとして、幾分輕蔑されたものらしい。これを多く用いたのは、もっぱら下級の芸人であつたようである。しかしこれらの区別も、程度の問題で、決定的なものでなかつた。その演ずるところやものによつて、上級の芸人でも、下級の楽器を使用したからである。

とにかくこの *scop* や *gleömon*, *trouvere* など、総じて *minstrel* といわれたものは中世も相当すむまで、その存在価値を主張することが出来た。しかしその全盛の時代は、大体第十三世紀を以て終るといわなければならぬまい。やがて前にも触れたとおり、世の推移と共に、彼らの世界も複雑となり、その職能も單純なものではなくなつて、いろいろと分極作用を起すこととなつた。例えば先にも述べたとおり、かつての *scop* のうたは、語られる部分と歌われる部分とに分裂しはじめた、即ち歌の台本をつくる詩人と、それを歌う歌誦者とに分れはじめた。やがて印刷術の

イギリスの演劇的風土について

発明が行われて、稿本写本（manuscript）ではなく、書籍即ち books が生れて、記録伝達の役を果たすことになった。その書籍も入手容易となり、読書が日常の茶飯事となってきた時は、彼らは衰微の斜面を速やかに下りはじめた。そして歌の台本を作っていた詩人は新しい事態に適応することができたけれども、単なる歌誦者の仕事はなくなってしまった。そして第十五世紀、六世紀とすすむにつれて、中世式の高級芸人は亡びの運命を辿ることとなった。そして下層の芸人は、強靱な生命力を発揮して、雑草のように、その存在をつづけてきた。道化などは依然として王侯、貴族たちに、笑いと慰安を供給したし、奇術師、軽業師、動物使いなどは、その庶民性のゆえに、現在でもなお、若干その姿勢を変えた程度で存続をつづけ、恐らくは永遠の存在をつづけていくだろう。やがてこれらの芸人のあるものは新興の舞台俳優の仲間に入り、あるいはエリザベス朝などの特色の一つであった流行唄の歌い手となってしまったのである。

VII

インド・ゲルマン族の一支族として、その大陸の居住時代からの風習として彼らイギリス人の間に重い地歩を占めていた Scôp や Gleomon 及びやがてその周囲に群ることになる諸芸能の消長即ち展開及びその結果は、大体いままで一応述べたとおりであるが、しかし、これらが演劇の成生と展開に如何に関係してくるのかということになると、これまた簡単な事柄ではない。そこで演劇とは一体何か、その本質的な要素は何であろうかということにもなってくる。ここでそうした問題に触れるつもりもないし、またその場所でもないが、しかしとにかく演劇は総合芸術であるから、芸術のあらゆる分野、あるいはそれ以外のものをも含む複雑さを見せている。しかし最も素朴な、根本的なことをい

えば、まづ言葉、これにつづく行動、それらを具現する演出者、その演出の場所、さらにまたそれらすべてをうける第三者即ち一般観衆、これらを第一義的に考えなければなるまい。まづ言葉である。それは独白などを別とすれば、大体会話少くとも対話を考えなければなくなってくる。中世の初期民族的弾唱詩人などの活動がまだ華かであったと考えられるころ、はやくもこの劇的要素の一つと見られる対話体類似の詩、あるいはそれを部分的に含む詩歌が見られる。Cynwulf（八世紀末の詩人）の作といわれる *Crist* 三部作（*The Advent, the Ascension* 及び *the Last Judgment*）がそれであり、その一部中にマリアとジョゼフとの間に対話が見られ、往々英文学における最古の劇的な場面として例証されるものである。つづいて中世もすみ、アングロ・ノルマン時代に討論形式の詩即ち *debate*（*strife, argument*）の文学が生れている。これはもちろん対話の形ではあるが、これは抑圧されていたものが反抗の気持を僅かに残す一つの方法として中世の社会事情が必然的に生み出した一つの文学形式であって、常に性質や利害得失などが互に相反し、相対立してゆずらない二者（例えば「夏と冬」「肉体と靈魂」などの如く）が、互に自己の優越を主張するものであった。したがってその対話は、それぞれ自己の主張を明瞭に述べようとするところに目的があつて、劇の場合のように、ある行動を導くものではなかった。そこでこの詩は対話の効果、その方法や意義を示し、背後から劇に手をさしのべた次第は充分考えられるけれども、直ちに劇とつながるとはいえない。*Crist* などの場合は、当時の弾唱詩人たちによって弾唱されたかも知れないけれども、討論詩にいたっては、そうした事態を必ずしも考えなければならぬ実情でもない。したがってここで特にとりあげられるものは、聴衆あるいは観衆（*Audience*）についてである。そもそものはじめ、いわゆる弾唱詩人たちは単に弾唱しただけであつたに相違ない。しかしそのときでも *audience* はいた、そして弾唱者はもちろん *players* であつた。しかし時代がうつるにつれて彼

らは演出したとすれば、即ち身振、表情のみならず、場合によっては、衣裳にまで注意したとすれば、すでに聴衆觀衆を意識した *actors* の要素をもっていたといえる。かりにそうはいえないとしてもとにかく彼らは聴く耳や觀る目を育てていたことは事實である。これが大切なことなのである。この聴衆、觀衆は個々の一人ではないのである。あくまでも群衆すなわち衆なのである。この衆に訴えるのは、結局雄弁術とある種の音楽及び劇なのである。抒情詩人は結局己一個のために作る。すなわち彼を充分に理解同感してくれる世界中の少数者の特殊の個々人のためにつくる。批評家や小説家も、それぞれ獨居の個々の讀者のために作をする。すなわち讀者の多少に拘らず、作者は個々の一人一人に話しかけるのである。こうした事情は、絵画、彫刻などの場合も同様である。これらは、数多の觀客によって、同時に觀賞されるように見えるけれども、その訴えるところは、つねに個々を対象とする。その個々の精神に訴えるのである。しかし劇は本質的にそれらとはちがったものをもっている。必然的に多數の群衆に同時に訴えるような性質と形とをもっている。この多數の、特殊な、つまりものをきき、ものを觀ることのできる、または、そうすることの好きな群衆を、彼ら彈唱詩人などが育てたこと、少くとも劇のために用意してくれたことは事實である。そしてこの群衆すなわち *audience* は、やがて自らの好みによって、その見もの、ききものを、求めることは必要であつた。かくして演劇の生成展開に対して、間接ながらも、しかし決して看過すべからざる重要な役割を果し、特殊の雰囲気をつくってくれたことは、充分銘記されなければならない。このほか、すでに触れた *minnis* や *pantomimus* とか *farce* とかは、その幼稚さその猥雑さなどは別として、とにかく、大まかな意味では演劇の屋根の下に入るものである。また人形芝居については、その起源や展開などが明瞭ではないが、これがつきりと世上に流行するようになってからは、人形とはいえ、すでに芝居と銘打つからには、演劇との関連は、あげるまでもないことである。とに

かくイギリスの演劇が隆盛に赴くまで、この国では「³⁰少くとも二百年に及ぶ演戲的な催しものが、裝飾装備のショー singing, reciting などにおける伝統的技術の遺産とともに、その興隆の背後に控えているのである。」

注

(1) 演劇の本能は、未開の民族にも見られるように、ほとんど如何なる民族もこれをもっているのであるが、キリスト教の郷土であつたヘブル人の間には、演劇的なものに対する一種の偏見ともいふべきものがあつたらしい。後の Puritan たちの演劇嫌惡、俳優蔑視などは、ほかにも理由と事情はもちろんあるけれども、この偏見的精神につながるものを全然もっていないともいえないようである。この精神については旧約の Deuteronomy, XXII を参照。またローマにあつてはギリシヤの場合とちがひ、演劇は決して強固な芸術的形象でもなかつた。この国では演劇は商業化され、また恐らくそのために墮落してもいいつた。ローマ法律はキリスト教の勝利の前と後にかわりなく、演劇關係にきびしかつた。例えば執拗な觀劇は離婚の理由ともなつたくらいである。そしていろいろの点で教会は異教徒たちのきびしい道德的感情を反映したようである。また剛健誠実で時には陰鬱でさえあつたゲルマン人たちは、南方人の明朗快活な陽性を輕薄で浮氣不真面目とも觀じたらしく、そのためもあつて彼らは自らは意識せずして教会の方針に協力した結果となつたらしい。かくしてその他いろいろと複雑な事情が一種の合

力を形成し、さしも強力な伝統につながる古典の演劇をローマ帝國の衰亡とともに亡びにみちびいたものらしい。なおこのあたりについては A. Williams: *the Drama of Medieval England* pp. 4-5 その他を参照。

(2) この「苗床」という言葉をはじめて使用したのは、故木方庸助博士である。

(3) はじめ「この Scop とか gleomon の間には格別の區別は見られなかつた」が、後、時代がうつるにつれて scop はむしろ壮大な詩歌を扱い gleomon はそれより下級のものとされ、ゲルマン本来のものではない南方ラテン系統のものを扱うものと考えられた。また「人によつては、區別ははじめから存在し、Scop はいつても定住の Court poet であるのに対し、Gleomon は Wandering singer であつて、作家といふよりはむしろ借用家(Borrowers)であつて、下級の人々たちを相手にしていた」とも考えられているが、しかし例の *Widsith* の歌われたころには、少くともこうした區別は見られなかつた。そこで本篇では多くの場合大同小異のものとして扱っている。なおこの注での引用については、E. K. Chambers: *the Middle Stage* Vol. I, P. 30, ll. 4-5 及び同書の P. 34, ll. 3-7 を参照。

イギリスの演劇的風土について

- (4) the Myrings は Eider 河と Elbe 河の間の地域にいたゲルマンの一部族であり the Angles とは隣りあいとなっている。
- (5) R.K.Gordon: Anglo-Saxon Poetry, (Everyman's Library) P.75. ll. 6—9.
- (6) the Medes はいまの Iran の西北部、カスピ海沿岸地域の住民であり、紀元前七世紀—六世紀に栄えた。そして紀元前五五〇年 Persia に亡はされている。時代の点でもまた場所を考へても Widsith がここに巡遊したことは考へられる筈がない。
- (7) E.K.Chambers: the Medieval Stage. (vol. 1, P.30. ll.15—17)
- (8) E.K.Chambers: the Medieval Stage. (vol. 1, P.28.28—30)
- (9) アングロ・サクソン人の大ブリテン島占取以後、この国にキリスト教が伝えられたのは南と北とからであった。南では、五九七年パリよりケント王室に、即ち St. Augustine によってローマよりのキリスト教がカンタベリに伝えられた。北の場合は南の伝来よりもわずかにはやく、五六三年スコットランドの西海岸沿いの小島 Iona に、St. Columba によってアイルランドのケルト系のキリスト教が伝えられ、ここからさらにノーサンブリアに入り、一時はこの流派の活動が、イギリスのキリスト教の主導力となり、この国のキリスト教化及び文化水準の向上につくしたその功績は甚だ大きい。
- (10) Aldhelm (640?—70) は、はじめ Abbot of Malmesbury (675) だった Bishop of Sherborne であった。イギリスにおける最初のすぐれた Latin writer であり、宗教詩を広めた。当時の

文化運動の指導者であったといえよう。

- (11) バイブルなどの理解においては、しばしば聖者は北欧の戦士とまじりような描写をうけているし、地獄なども単なる業火の燃えさかるところであるだけではなく極暑極寒がこもこもやってくる場所としているのを見ると、その方が地獄のアイデア理解について、北欧人には得心できたものであったらしい。
- (12) Judith は Apocrypha 中の the Book of Judith の女主人公で彼女をヒロインとした old English 時代の、作者不明の詩で the Assyrians の王 Nebuchadnezzar の軍隊が、彼女の町 Bethulia をおびやかした時、彼女は一身を犠牲にして敵陣に入り、その将 Holofernes の首を斬って、その町を救うという物語である。現存しているのは、わずか三百五十行の断片ではあるが、その詩の内容や情調が、当時の英雄叙事詩そのまゝで、ハーブに合せて弾唱するのに、まことにふさわしいもののようと思われる。なおこの物語は、Abercrombie や Hebbel をはじめとし、世界各国の作家に悲劇的名篇への主題を与えている。
- (13) Cf. E.K.Chambers: The Medieval Stage, vol. I, P.31.
- (14) Alcum (735—804) York に生れ、その修道院で教育される。七八二年フランク王 Charlemagne に文化指導の顧問として招かれ、その文化推進に大うに力を致したことは、史上に特筆されることである。後、退いて Tours の St. Martin の修道院長として余生を送る。当代第一級の学者で彼によって当時のノーサンブリア文化の水準の高さを伺うことができる。現に彼が育ったノーサンブリアの学問の方面での彼の先輩 Bede の

欧州における盛名は現代人には信じられないほどのものである。

- (15) E. K. Chambers: *The Medieval Stage*, vol. 1, P. 331. 9
(16) なお、このあたりについては、前掲 E. K. Chambers: *The Medieval Stage* vol. 1, S. 323 頁のあたりを参照。

- (17) E. K. Chambers: *The Medieval Stage*, vol. 1, P. 34. 11, 18-19
(18) Scythia は、いまの Black Sea と Caspian Sea の北部

一帯の地域をいう。いまはソ連領。例の Timur (Marlowe の Tamburlaine) はこの地の牧夫であつたともいわれている。

- (19) Attila (? - 453) は the Huns 即ち「匈奴」の王であるからゲルマン人ではない。

王のヨーロッパ侵入は、彼ら欧州の大きな脅威となり、彼は *The Scourge of God* といわれたが、四五一年七月北仏 Catalanian field の激戦で、西ゴス及び、ローマ人連合軍のために破られた。しかし翌年軍を新たに北伊を襲い、ローマを脅かした。そこでその翌年の彼の死には、西欧は安堵の胸をなでおろした。

- (20) *Chanson de geste* は、第十一世紀から第十三世紀に亘って *Charlemagne* と十二の勇士を材料として、北フランスの trouveres がつくったフランスの英雄詩であり、中世ロマンスの代表の一つでもあり、英のアーサー王物語に相当するもの。その中でも *Charlemagne* の甥 *Roland* を主題にした *Chanson de Roland* が最も有名。

- (21) デーン人のイギリス侵入は、七八七年はじめて *Devonshire* を襲い、その南岸に上陸した。かくして、彼らの侵入はよ

うやく本格化し、北方ではその盛時といわれる Offa (七五七年王となる) 治下の Mercia を襲い、アルフレッド及びその子孫の West-Saxon 王国を悩ましてつげ Maldon 及び Brunanburh などの激戦も行われ、時にいろいろの消長はありながらも、ついに一〇一三年 Ethelred 王を王妃の生国 Normandy に走らせて、イギリスを制圧してしまう。侵入をはじめてからの時まで二百余年の長年月に及んでいる。

- (22) cf. J. J. Jusserand: *English Wayfaring Life in the Middle Ages*, P. 103, 105 and E. K. Chambers: *The Medieval Stage* vol. 1, P. 43

(23) このあたりについては、前掲の Jusserand の一〇七頁以後を、また同じく前掲の E. K. Chambers の四七頁以後を参照。またこの Edward II を話題とする前後には、彼につらなる諸王と弾唱詩人との盛んな交渉を誌している。Edward II などとは Westminster の自室に、四人の弾唱詩人を招き入れているくらいである。

- (24) 一二五八年十月十八日附でヘンリ三世の発した布告文はフランス語のほかに英語でも書かれていた。それより先一二三九年王とその王妃 Eleanor of Provence の間に生れた王子は Edward (後の Edward I) と命令されていた。ノルマン征服以来、イギリス古来の名称即ち被征服者の呼名を征服者がその子に与えたはじめてであった。それまではみなフランス風の名称(例えば William, Henry, Stephen, Richard, John など)と与えられていたからである。またいろいろの原因から起った

国情の変化もあって、一三五六年には、ロンドン及び Middlesex の地方裁判所では、法廷での弁論はすべて英語によるようにとの規定が設けられ、つづいて一三六二年十月の議會での弁論はすべて英語によるべしという法案が可決された。そしてその翌年の開院式では、大法官が式辞を英語で述べている。ノルマン征服以来、王座をうばわれた英語は、再びその王座を回復するまでには、長い年月の経過が必要であつた。

(25) このあたりの事項については E.K. Chambers: *The Medieval Stage*. vol. 1. 67—72 頁あたりを参照。

(26) cf. E.K. Chambers: *The Medieval Stage*. vol. I. PP. 83—84.

(27) cf. E.K. Chambers: *The Medieval Stage*. vol. II. PP. 157—158.

(28) E.K. Chambers もいうとおり「英文学では、アングロ・サクソン時代から對話体には自然な親和感をもっていた」ようであり、*Cynewulf の Crist* の中に見られる對話の部分は作者の創意ではあろうが、この親和感とつながるものをもつといえよう。そして弾唱詩人たちが語るとき、この對話の方法を採用したことは当然考えられる。そこで Chambers も *Dialogue then, in one shape or another, was part of the minstrel's regular stock-in-trade* (*The Medieval Stage* vol. I. P. 81. II. 9—10) といふ。

(29) 「討論詩」すなわち debates (strifs or estrifs) の形式の文学に関して *The Harrowing of Hell* (作者不明の十三世

紀後半の詩) が問題にされる場合がある。内容は、キリスト、悪魔、門番、地獄に捉われている人間即ちアダム、イブ、エブラハム、デーヴィッド、ジョン、モーゼなどが登場人物であり、キリストは悪魔にその返還を要求するけれども、悪魔はこれを峻拒して対抗する。キリストはついに地獄の扉を破つてこれを解放するのである。まづ語手は人間の地獄ゆきの次第を語り、その救出のために、キリストは地獄に出かけて、つぎのようにいったとして、キリストの独語を導く。この独語で、キリストは、人間救済のための苦難と十字架上の死をのべ、これから救出にとりかかるといふのを、悪魔が聞きとがめる。そこでキリストと悪魔の間答がはじまる。キリストは、自分のものを救いに来たという。悪魔は、アダムが飢えてわが輩のところに来たから林檎を与えたので、それで自分のものだといって、ゆずらない。ついに議論はその領分に及び、天地はそちらのものが、地獄はこちらのものであるといつて互にゆづらない。つぎにキリストと地獄の門番との對話となり、それによつてキリストは地獄の門を破つて悪魔を縛りつけることがわかり、またつぎにキリストと David 以下の對話により、彼らの救出と感謝が示され、つづいて一般人に対するキリストの警告があり、最後に語手の天国への祈によつて終るのである。この形式が對話ではあり、行動を想像して附加出来るので、討論の文学というよりは、劇であるといふのである。しかし實際のところ、くわしい吟味は、ここではその場所ではないが宗教的教訓を念とした討論詩というのが当を得た意見であらう。

ただ幼稚ながら劇の形式に接近したという点では、この国における最も古いものといえよう。

(38) M.C. Bradbrook: *The Rise of Common Player*. P. 17.
II. 21-24.